

7月8日(木)、参院選挙の応援演説をしていた安倍晋三元首相が、背後から銃で撃たれ、心肺停止の状態であるというニュースに驚いた。そして実行犯が捕らえられる様子も放映された。現場での、事件時の安倍氏と、警護の人々の様子も何度も放映され、胸が苦しくなった。殺人事件の目撃者になったかのような、生々しさを感じた。「安倍氏、死ぬのは早すぎる、まだ、説明責任を果たしていない！」と私は焦った。

その日の夕方、安倍夫人が駆け付けた後、すぐに死亡が確認されたという報道があった。安倍夫人がお気の毒でならない。安倍氏の霊が安らかに憩えるように共に祈りたいと思う。かつては、右翼、左翼の武闘もあったが、日本では日中、街中での銃撃など、暴力団同士以外に、あり得ないと思っていた。有名人にはこのような思いがけない危険があるのだということだ。

しばらくして、犯人は政治的主張による犯行ではなく、個人的な怨念を晴らすための犯行であると自供したという。そして、その怨念は「旧統一教会」から受けた経済的困窮、家族関係破綻によるものであった。「旧統一教会」の責任者を狙えず、「旧統一教会」と関係があった安倍氏が一番影響力があると思い、彼を狙ったと言う。その後、新聞、テレビ、ネット上では、安倍氏と「旧統一教会」との関係、自民党安倍派の議員の「旧統一教会」との関係の記録が連日報道されている。

「旧統一教会」には私も悲しみ、苦しんだ記憶がある。教会関係者に、無表情、無感情になって、母親の言葉を一切受け付けない大学生や、自己啓発合宿セミナーに行かなければならないと思い込んで、親友の疑問の声に耳を貸さない女性がおられた。洗脳という言葉も聞いた。靈感商法、集団結婚式など、テレビでもその異様さが特集されていた。一方、「脱会、洗脳解き」のための説得に苦慮している牧師もいた。やがて、暴力的な新興宗教「オウム真理教」が暴れ始め、摘発を受け、裁かれ、解散させられた。様々なカルトが、隠れた形を取り、いまだに影響力を持っていることを実感させられた。「旧統一教会」は権力者に取り入り、ある時は広告塔にし、ある時は隠れ蓑にして、活動し続けていたことが明白となった。その陰に犠牲者がいる。今回の犯人にその点では同情するとしても、暴力は許されない。あらゆる暴力に私は反対したい。

その点で安倍氏の権力の横暴も許されない。安倍氏は、女性国際戦犯法廷のNHK報道番組への介入があった。首相になり、集団的自衛権の行使容認など平和憲法を敵視し、米国追従の外交で日中関係など近隣諸国との摩擦を激化させてきた。オリンピック開催のためにフクシマはアンダーコントロールと嘘。国会での虚偽答弁や憲法に基づく国会開催の要求無視など民主主義・立憲主義を破壊してきたこと、森友・加計学園、桜を見る会など行政の私物化を行ったこと、アベノミクスや全世代型社会保障など貧困と格差を拡大させ、国民生活を破壊し続けたことなどは到底評価できない。大きなゼスチュアと美辞麗句を用いて、人目を引くけれども、彼の政治は、「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」という、民主主義とは全く異なる、かつての権力者の姿勢と変わらない。安倍氏と自民党の「旧統一教会」関係の究明を手始めに、国民が疑問に思っている安倍氏の残した宿題に取り組むのが岸田首相がすべきことで、安倍氏に目を瞑る国葬という儀式ではないと思う。